

Ābhidharmika について

——婆沙論を中心として——

松 濤 泰 雄

広義のアービダルミカ(以下アビダルマ諸論師)は、アビダルマに關係する人々を指す。有部アビダルマ論書中では、婆沙論をはじめとして、五事毘婆沙論、雜心論、俱舍論、順正理論等にその所説がある。俱舍論では阿毘達磨と対法との二系統の漢訳があり、大婆沙論の阿毘達磨者、阿毘達磨(諸大)論師、対法者、対法(諸)師、また阿毘曇婆沙論の阿毘曇人、阿毘曇者がそれに相当する。

婆沙論中のその所説と典拠について検討して見たい。(その所説は約四十箇所あり登場する順に番号を付した。)

アビダルマ諸論師の定義を述べる。

称友疏(四四六頁)は「六足のアビダルマのみを誦する者達である」とし、光記(巻一九)は「六足、発智論師」とする。婆沙論は発智論を説く理由の一つとして、(1)「阿毘達磨の諸大論師の傾動せざるを願わさんが為の故なり。」(巻一)と説く。

これらよりするとアビダルマ諸論師とは、婆沙論成立時にはすでにその名称の存在していた六足、発智による諸論師と言える。

また、有部内の特殊の名称とすると発智系の論師であり個人名を有する論師と譬喩師に対すると有部全体を指す。(木村泰賢『阿毘達磨論書の研究』と、有部の自派の論師の内に迦濕弥羅国諸論師、

如実義者、如是説者、応理論師等とともに含まれる。(福原亮厳『有部阿毘達磨論書の発達』)とも定義されている。

アビダルマ諸論師と論自体、他の諸論師、他の論書との關係を述べる。

(一)(2)「有対の造色は有対の造色の俱有因とならない」(巻一二七)
(3)「分位(二時分)縁起説」(巻二五・巻六〇)は、論の他の箇所では、(4)「中有不可転論」(巻六九)は阿毘曇婆沙論では、論自体の説となつてゐる。(5)「色法は色法のために同類因となる」(巻一三二)は論の他の箇所には迦濕弥羅国諸論師説(しかし阿毘曇婆沙論では阿毘曇人)とあり、(6)「四向四果の実体は五つ」(巻六三)、(7)「四諦の三転に關する契経解釈」(巻八〇)は「評して曰く」と同じ主張である。(8)「二十二根の実体は十七」(巻一四二)は如実義者説と並記され同じ主張となつてゐる。しかしこの(8)以外はいわゆる有部自派を形成してゐる諸論師とその所説が並記されてゐることはない。

(二)アビダルマ諸論師説の内で十二が後の論書でも正義とされる。

その内で(5)は俱舍論(プラダン本二〇〇頁、三四一頁)は毘婆沙師に属するもの(vābhaṣīkṛtā)とする。(9)「トガラは実在しないが煩惱と煩惱の対象の二つは実在する」(巻五六)は雜心論(巻四)に、(10)「水等の影像の実在」(巻七五)は順正理論(巻二三)に、アビダルマ諸論師説とあり、(11)「仮蘊と極微」(巻七四)は俱舍論(プラダン本一四頁)にはアビダルマ諸論師説として引用されてゐる。(12)「三時業と受報時」(巻一一四)は順正理論(巻四〇)では論の正義となつてはいないが、アビダルマ諸論師自らが三時業説が理においてすぐれてゐると述べてゐる。これら以外はアビダルマ諸

論師説と特記されずに論自体の主張とされている。

所説の内容を検討する。それらの内で明らかに異説とされるものはないが、その所説だけを取り出すと発智、婆沙と解釈を異にするものもある。

(一)婆沙論(巻五)は品類足論(巻七)と同じく「等無間縁とは阿羅漢の最後の心心所を除く諸余の過去現在の心心所である。」と自体を定義し自体が相であるから別に相を求めるべきでないとするのに対して、アビダルマ諸論師は(四)「能く各別の自相の法をして無間に生ぜしむるのが等無間縁の相である。」(巻五)とする。

(二)発智論の「無明は行に縁たり」、「取は有に縁たり」を解釈するにあつて、一般的には発智論(巻一)のように行と有とを業とすべきであるのに、アビダルマ諸論師は行と有とを五取蘊であるとするとする(3)の分位縁起説に立つているから、発智論と相い反することはない。

(三)異生性を解釈するのに譬喩師の異生性の実体の否定に対して、(四)異生性の実体のあること(巻四五)のみを述べ、発智論(巻二)、婆沙論、俱舍論にある「異生性とは聖法を獲得しないこと」には言及しない。

(四)婆沙論は大種と造色について能造、所造等の九種の区別をなす。アビダルマ諸論師は(四)十一種の区別(巻一二七)を述べるが等しいものはない。

所説の典拠を探る。六足、発智にはつきりと典拠のあつたのは次の五例である。

(一)アビダルマ諸論師は(四)尋は麁性、伺は細性と言えるがその逆は

Abhidharmika 2121 (松 壽)

成立しないと異説を斥けて、尋、伺の界地分別の正当なること(巻五二)を主張する。尋、伺の界地分別は発智論(巻一)にある。

(二)アビダルマ諸論師は(四)のように説くが、三時業は品類足論(巻九)にあり、発智論(巻一一)では不定業と区別されている。

(三)(四)「表、無表業の実在」(巻一二三)の主張については、集異門足論に「無表」、「語表」、「身表」という語があり、品類足論(巻一〇)には、「表」、「無表」という分類がある。

(四)アビダルマ諸論師は(四)四諦の自性を、「五取蘊が苦諦、有漏の因が集諦、有漏の折滅が滅諦、学、無学の法が道諦である。」(巻七七)と説くが、これは集異門足論(巻六)にある。

(五)(四)三念住(自性、相雜、所縁)の分類(巻一八七)の説は、集異門足論(巻六)の四念住の三釈に相当する。

次の三例は発智論に典拠が推定されるものである。

(一)(二)は発智論の俱有因(巻一)に有対の造色がないということが発智論よりの所説とも言える。

(二)(四)「眼等の五識は相互に等無間縁となる」(巻一三一)は、アビダルマ諸論師の言う「苦根は苦根のために因と等無間縁と増上となるも所縁に非ず」という発智論(巻一五)を典拠とすれば、発智論よりの所説となる。

(三)(五)の説は、俱舍論(プラダン本八五頁)は発智論(巻一三)の「過去の大種は未来の大種のために因と増上となる」を典拠とし、因とは同類因であるとするが、順正理論の譬喩師(巻一六)はそれを否定する。

しかしその他は六足、発智に典拠が見い出されなかった。

(大正大学総合仏教研究所研究員)